



山岳部員のバッジ

上は1本のザイル、下は2本のザイルが絡むデザインに縁どられ、五三の桐にAlpine ClubのイニシャルACがデザインされている。

Peer Garden

茗溪アルバム

茗溪創基 150 年記念事業

茗溪 150 年の思い出を紡ぎませんか？

山男の歌

娘さんよく聞けよ

山男にや惚れるなよ

山で吹かれりやよ

若後家さんだよ

山で吹かれりやよ

若後家さんだよ

昭和 37 (1962) 年、ダークダックス(男性四重合唱団) が発表した『山男の歌』の一節である。神保信雄の作詞であるが、江田島の海軍兵学校で愛唱された『巡航節』が元歌らしい。

昨年の夏、唐沢孝一氏 (S41 教大動物) から「思い出の品(寄贈)」と題するメールが届いた。

▼在学中に所属した山岳部のバッジその他の画像を寄贈させていただきまます。どうぞ宜しくお願いします。

寄贈の品々の説明とともに、画像が送信されてきた。

▼手元に残るのは「部員バッジ」と「シユラフ」、「山岳部の部報」、「白馬」(限部研二追悼録編集委員会)、数枚の写真、劣化した白黒写真のネガフィルムのみ。個人装備のほとんどは散逸しました。

ほとんどが散逸した中で「部員バッジ」はベルトに取り付けられたまま書棚の片隅に残っていた、ということである。

その部員バッジが、上の画像である。

●山岳部 部員バッジ

唐沢は、『山男の歌』が発表された年に、東京教育大学に入学した。入学後2か月ほどして、山岳部に所属した。だが、部員バッジを手にしたのは翌年である。

新入部員は一年間頑張り、2年生になると正式な部員として認められバッジが賦与された。「バッジを手にした時の嬉しかった記憶が甦る」と、唐沢は記す。

部員バッジを手にした当時の喜びと、一枚の画像に説明が加えられていた。

左の画像は、バッジの裏面で、下方に74という数字が刻印されている。これは部員番号ということである。



東京教育大学山岳部は、文理大からの伝統を継承し、昭和 25 (1950) 年に復活してから、昭和 53 (1978) 年に閉部となるまで活動を続け、120 名程の部員が卒業していった。

部報「偃松」第11号には、井出陽郎氏 (S31 教大農) の部員番号が「8」であると

記されていることから、唐沢が卒業するまでの間に、66 名の山岳部員が卒業したことになる。部員が1名の学年や10 名を超える学年もあり、学年平均 6〜7 名の部員がいたようである。



「部員バッジを見ると、汗して登った山々と青春の日々が思い出される」と記す唐沢の、誇らしげに部員バッジをベルトに取り付けた若き姿が目には浮かぶ。

昭和 31 (1956) 年、「経済白書」が「戦後は終わった」とした年である。その年の5月、日本隊がマナスル初登頂を達成し、その記録映画『マナスルに立つ』が上映され、全国の映画館は長蛇の列をなす盛況ぶりであった。また、井上靖の小説『氷壁』が新聞連載されるなど、空前の大衆登山ブームが起こった。

ちょうど、部員番号8番の井出陽郎が卒業した年である。

東京教育大学に山岳部が復活した年から井出が卒業する6年間の部員はわずか8名だったが、井出の卒業年を境に、山岳部は活況を迎えることとなる。

●山道具

唐沢は、「アルバイトをしながらキスリング(2尺4寸)、登山靴(水道橋の登山専門店で注文製作)、ピッケル、シエラフなどを揃えた」と記している。



教育大山岳部の春合宿(南アルプス、S38年3月)より
キスリングの口の横幅は、2尺4寸(80cm)と1尺8寸(60cm)があり、「ニコヨン」「シャクハチ」と愛称された。この横幅により、列車内に横歩きで入ったため、「カニ族」と呼ばれた。

ピッケルやアイゼン、キスリング、登山靴などの山道具のほとんどが輸入品で、当時の学生にとっては、「超高級品」ばかりであったはずである。

昭和初期、国産登山用具は、仙台の山内東一郎と札幌の門田直馬という卓越した技能をもつ鉄加工職人によって作られた。

同じ頃、二代目片桐盛之助がスイス製のザックをもとに、日本初のキスリング型リュックザックを製造している。

純国産登山靴は、「ギヤラバンシューズ」として知られた軽量登山靴であった。

(株)山晴社(のちの(株)ギヤラバン)の創業者佐藤久一郎が(株)藤倉ゴム工業の協力を得て制作し、第一号を発売したのは昭和29(1954)年のことである。

昭和31年の日本登山隊マナスル登頂は、大衆登山への道を拓いただけでなく、その後の日本の山道具にも大きな影響を与えた。

職人や起業家の手による山道具の出来栄の噂は瞬く間に広がり、ここに、山道具の国産ブランドが誕生した。

唐沢が山岳部員として活躍した当時、門田のタニアイゼンとピッケルは、山岳家にとっては、憧れの品でもあった。



1960-70年代に製造された特殊金属モデル

大衆登山の時代の到来とともに、「ギヤラバンシューズ」は、「登山靴(ハイキングやワンゲル用)」の代名詞として愛用されたが、「氷壁」を登攀する靴ではない。

近代アルピニズムを信条とする部員にとって登山靴は命を預けるもので、自分の足の形状やサイズに合わせて専門店(唐沢の場合は、水道場の「深沢」で注文製作をするのが常であった。

●占春園の銀杏の木

唐沢より2年後輩の山岳部員に、清水進一(S43教大数学)がいた。唐沢も、印象深い部員として清水を覚えていた。

平成26(2014)年、神奈川茗溪会の会長でもあった清水は、『茗溪かながわ』第4号の中で、「雑感―茗荷谷」として以下のように記していた。

▼現在は、昔の校舎は跡形もありませんが、占春園だけは残っています。時々昔を思い出しながら付近を散歩しています。が、あの頃と比べると、池の周りは鬱蒼とした森になり、私が過した昭和39(43)年春の頃とは大分変わりました。

▼その中に、池の畔の銀杏の木が巨木になって残っています。この木は私にとっても忘れがたいもので、山岳部員であった私たちの岩登りの訓練場所でもありました(他に、W館の横にあった高い煙突も懸垂下降の練習に使いましたが)。



▼垂直な岸壁にハーケンを打ち、鐙を使って登攀するための練習には最適な木で、銀杏には申し訳ないと思いますが、私が大きな事故もなく活動できたのも、この訓練のお蔭ではなかったかとも思います。

▼卒業後も、東京に出かけた時などは、機会があれば必ず占春園に行き、銀杏の木の下から、一本だけ残したハーケンを眺めては学生時代を懐かしく思い出していました。そのハーケンも、ここ十数年前から見ることができなくなりました。

*文中では、敬称を略させていただいた部分もございます。ご容赦ください。

思い出の品々の寄贈(お願い) 茗溪創基 150 年記念事業

「茗溪創基150年記念事業」への参加のあり方として、「思い出の品々」を寄贈していただく企画を実施しています。

1 ご寄贈いただく「思い出の品々」について

- ・「思い出の品々」につきましては、その内容の指定や限定はございません。
- ・ご提供頂く場合、「簡単な説明」等を添えていただければ幸いです。

2 送り先

- ・電子資料は、メールにて (peer@meikei.or.jp) までお送りください。
- ・郵送先は、「茗溪会大塚事務所」宛てに願います。

〒112-0012 東京都文京区大塚 1-5-23 茗溪会館内 (電話 03-3941-0136)